

ような誤りは、所謂瑕瑾とも称すべきものであろうが、有用な書であるが故に惜しい気もする。

しかし評者が最も強い関心をもったのはIVの「医史学は閑人のか—あとがきにかえて—」である。「スキエンティア」創刊号(二〇〇一年)に発表した論考という。この中で氏は新しい学問の誕生、古い学問の変貌、医史学教育の貧困、貧困の原因、医史学への開眼のために、教職者の影響という小見出しにわけ、わが国における医史学の貧弱な状況を嘆いておられる。その原因の一つをわが国の草創期に遡って、医学教育がオランダ、ドイツの軍医学校の影響を強く受けたものであるとしている。それもあろう。さらにこれ以外に氏が指摘する諸種の要因も評者は否定しない。しかしそれ以外に、もっと大きな原因があろうと思う。それは日本医史学会のあり方ではないかと評者は愚考している。深瀬氏自身、現に学会の常任理事の要職にあるため、このことに言及することは不可能であろうが、会員全員が深く考えなければならぬ深刻な問題であると考えている。否、会員が日頃からこのことを考えているが、口に出せないで、ただ黙していると思う。氏の「医史学は閑人のか—あとがきにかえて—」の中で、「自らが学ぶ学問の歴史を知らずして、その学問の正しい理解は得られない。」を二度繰り返し記しているが、多くの医師たちは「医学史を知らなくても、立派に医療を続けていきますよ」と返答するに違いない。医史学の役員を含めた医史学を学ぶ人がこれにどのように答えるかが問題であらう。

日本における西洋の科学思想の受容と普及、さらに西洋医学の受容と普及に果たした影響を考慮するとき、ジェンナーの牛痘種痘法の受容と普及の問題は極めて大きく、この意味において、深瀬氏の「天然痘根絶史」はこの方面の研究において必ず参照すべき基礎的文献であることは間違いない。パイオテロリズムが社会的話題になっている現在、天然痘の恐ろしさと幕末にこの恐怖に敢然と立ち向かった医師たちのことを改めて深く考えてみる絶好の機会を提供してくれた氏に感謝したい。

(松本 明知)

(思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五—七五一—一七八一、二〇〇二年九月二八日、A五判、四四八頁、本体八五〇〇円)

日本精神衛生会 編

『図説 日本の精神保健運動の歩み—精神病者慈善救済会設立一〇〇年記念—』

精神病者慈善救済会は、呉秀三の発意によって一九〇二年(明治三五年)一〇月一〇日に、医科大学教授・名流医家の夫人を中心会員として設立された。これは、精神病患者の救護、それにとりまう精神衛生啓蒙を目的とした団体であって、のちには会名から「慈善」をとって精神病患者のための社会事

業団体としての性格をつよめていった。そして戦争中に精神厚生会（小泉親彦会長）に統合されて、四十一年の活動をおえた（この歴史の詳細については、岡田靖雄「精神病患者慈善救治のこと―呉秀三先生伝記補遺（その二）―」、日本医史学雑誌 第三二巻第四号、一九八六年）。

本書は、その副題にあるように、精神病患者慈善救治会設立一〇〇年を記念して、この会の流れをくむ日本精神衛生会が編集・発行したものである。日本精神衛生会理事長の原田憲一が編集委員会の委員長で、日本医史学会会員である小峯和茂、松下正明および岡田が本書編集の中心にあつた。呉はおなじ一九〇二年の四月四日には三浦謹之助とともに日本神経学会（現日本精神神経学会）を設立しており、こちらの一〇〇周年記念誌は二〇〇三年初夏に発行されることになるだろう。

本書のおおまかな構成は

第一章 精神病患者慈善救治会設立の時代的背景、社会における精神病患者観

第二章 精神病患者の置かれた状況

第三章 呉秀三と精神科医療

第四章 精神病患者慈善救治会設立とその後の発展

第五章 日本精神衛生会および戦時体制

第六章 戦後昭和期の精神保健運動

日本精神保健関係年表  
となつている。

あつかわれていたのは、一八六八年以降であるが、時代的精神病患者観の資料としては江戸時代の憑きもの関係の四点もでている。また、戦後の精神保健運動は多様化してその全容把握は困難で、さらに一九六九年（昭和四四年）の第六六回日本精神神経学会総会（金沢）以降数年にわたる精神医学・精神科医療会の激動は歴史的評価がまださだまっていない。そんな事情もあつて、一九六五年あたりの記述はかなり疎になつている。

「図説」とあるとおり、写真を主にした図はおおく、かぞえると、約二五〇図。うち巻頭の一五図はカラー。錦絵や一八七三年の「教部省達」、「大阪府達」など、めずらしいものもおおい。ふるい病院の写真、著名患者芦原將軍の写真やこれによる勅語ものつている。私宅監置や戦前における精神病患者処遇の状況をしめす写真もある。じつは、これらの図のうち一二〇ほどは、精神科医療史研究会（岡田）が提供したものである。この点はこの研究会がよくもあつめたものだというよりは、日本では一般的にこういう資料の蓄積がないので精神科医療史研究会の収集が目だつということになるのだろう。

呉秀三の生涯、中心となる精神病患者慈善救治会の歩みは豊富な図でよくえがきだされている。一九〇八年に合州国コネクティカット州で精神衛生協会をはじめたクリフオード・ピアスの署名がはいった呉あての手紙ものつている。一八〇〇年ごろから狂疾者の私宅看護をおこなつていた京都の岩倉に

ついて、また禁酒運動についてもわりあいくわしい。比較的あたらしいことでは、一九六四年のライシャワー大使刺傷事件、一九八四年の宇都宮病院事件が、当時の新聞紙面をいれて、紹介されている。

これらのほかに「文学・小説における精神病者」、「文学と自殺」のコラムがあつて、それぞれの時代における関連作品が写真入りで紹介されている。とりあげられている作品は一〇〇をこえていて、これは貴重な異常心理作品入門になっている。戦前の精神衛生関係図書のほぼ完全な目録も写真入りでのつている。

ともかくも、図がおおいだけに、近代日本における精神保健、精神科医療の歩みがすつと目にはいつてくる。わたしは、看護教育にたずさわっている何人かに、教材の補助としてこれをすすめて、たいへんよろこばれた。『目でみる精神科医療史』を自分の手でだしたい、という希望をわたしはいただいているが、それがかなえられるかどうか。それまではこの本をもつて満足しているしかあるまい。

自讃の辞をやや過剰にかきつらねた。今となつては、ちいさな誤りも散見される。冒頭の「狐にばかされ」が「狐にだまされ」となっている（変態仮名の読み違えで、正橋剛二氏からご指摘いただいた）、私宅看護で有名なゲールの所在地がベルギーでなくオランダとなっている、など。

精神科に関係ない人にも、好個な歴史資料としておすすめしたい本である。

(岡田 靖雄)

(日本精神衛生会編集・発行、東京都新宿区弁天町九一番地、  
電話〇三―三二六九―六九三二、二〇〇二年三月二〇日、A  
四判、一三八ページ、横書き、二〇〇〇円(送料含))